

伊藤桂一

新潮社版



藤の咲くころ 六〇〇円	昭和四十六年二月十日 印刷 昭和四十六年二月十五日 発行	著者 伊藤桂一	発行者 佐藤亮一	発行所 株式会社新潮社 東京都新宿区矢来町七一 電話東京(〇三)二六〇二二三 〒一六二振替東京八〇八	印刷所 株式会社金羊社 製本所 神田加藤製本所
------------------------	---	--------------------	---------------------	---	--

乱丁、落丁本はお取替へ致します。

短編集「藤の咲くころ」・目次

川止め

七

藤の咲くころ

元

草の声

空

あやつりの糸

七

引継ぎ

三

背中の新太郎

二五

紅い魚

一七

枯れ野菊

一九

山雀

三九

七夕の夢

二五

装
幀

佐
多
芳
郎

藤の咲くころ

川
止
め

一

氾濫^{はんらん}した川水が、岸草の根を深く洗って、ふくらみながら流れている。しばらく川のとりに立って、黄濁した流れをみまもっていた郡主^{こおりしゆめ}馬は、

(だめだな、これでは)

と、断念のいろを見せた。泳いでも渡りたかったが、水泳ぎは不得手である。

旅籠^{はたご}も……川止^{かわど}めの客が溜^かまっていて、もぐり込むことも無理かもしれない。もぐり込めても、おちおちと眠れもすまい。しかし、歩き疲れていたし、少し休みたかった。

とにかく宿場へ引き返すつもりで、川沿いに戻りはじめていると、川ぶちの竹藪^{たけくさ}を切りひらいたところに小屋が一軒あり、立札が立ててあるのが眼についた。小屋に氣をとめたのは、雨露^{うろ}をしのげれば——という氣もあったのだが、立札も氣になり、近づいてみると、

——疫病^{えびょう}の女あり。寄るべからず。

と認めてある。

小屋は、入口の戸はたててある。脇に、背のびをすればのぞける明り窓があつて、これはあけてあつた。主馬がそこらなかをのぞいてみると、女がひとり寝かされている。板敷の上に蓆を敷き、その上に夜具を敷き、女はこちらに背を見せて横になっている。もう死んでしまっているようにも——思えた。

疫病の噂は、藩にいたときも、江戸から来た商人に、なにかときいたことがある。この女はこの小屋に放置されたまま、だれも恐れて近寄らず、死ぬのを待つて川ぶちで焼かれてしまうのかもしれない。どっちみち行きずりの旅びとなのだらうから、情をかけてもらえまい。

女は、うしろ姿だから、齡恰好はわからない。それに、小さい明り窓からだけの光線である。しばらく窓からのぞいていたが、主馬は戸をあけて、なかに入った。その戸は、あけ放したままにして上り框に寄ると、

「お女中。起きていられますか」

といった。そこまで寄ってみて、武家か、または武家の身寄りらしい女であることは、髪かたちで読みとれたのである。

「どなたさまで、ごさいましようか」

と女は、弱まった声で、こちらを見ずにいったが、意外に声は若かった。娘のようである。うなじのあたりの、青ざめてはいるが、皮膚のやわらかなかんじも、おぼろげにわかる。

「旅の者です。通りがかりですが、だれか、あなたの面倒をみてくれているのですか」

しばらく、シンとしていて、それから女はゆっくりとこちらへ向きを変えたが、主馬はその女

の眼に、驚きとも人懐かしさともつかぬ、ある必死なかがやきのこめられているのをみた。孤独で寂しかったのだらう。

「食事だけ、粥かゆを、朝夕に、宿の者が運んでくれるのです。それも、枕もとにそっと置いて、逃げるようにもどって行きます。言葉もかけてくれませんし、息もしないようです。こわがっているのです。私、まる三日、なにも食わずにおります。ひとりきりで、もしこの病やまいをなおすことができるのであれば、食わずにいるよりほかはない——と思ったからです。ここでは、まだ、死にたくはないのです」

それを、ひと息にいうのではなく、ぼつぼつと語りながらに、途中で泣きはじめている。それも、泣きごえになるというのではなく、自然に臉まはたからあふれてくるものがしきりなのだ。

「医師は、来てくれているのですか」

「はじめのときだけで、あとは来てくれませぬ。無駄と知っているからです」

「ひどいものだ——ずっと、寝たがりですか」

「はい。——あの、用を足しますときだけ、ものにつかまりながら起きます。それも、できなくなったらおしまいだと思っているのですが、まだ、そこまでは、大丈夫のようです」

疫病にしては、口のきき方に、みだれ——はない。武家か、武家勤めをしているのなら、見苦しい死に方はしたくないと、それだけは覚悟しているのだらう。

「これから、どこへ、行くとこだったのですか」

「江戸からです。白川の煙宿のあたりまで帰ります。両親の許へです」

「煙宿？——するとあなたは？ 私ほ、白川藩の者——だったのですが」

娘の眼に、たちまち喜色に似たものがよみがえり、激しくうなずくのをみて、主馬は、そこでやっと、上り框に腰をかけている。

「そうですか。江戸の藩邸から来たのですか」

二

——それから、一刻^{とき}ばかり経っている。

（死ぬまぎわになって、なぜこのようなことが起きたのだろうか？）

と、それをあやしみながら、蜘蛛^{くも}がいくつも巣を張りわたしている、煤^{すす}けた天井^{ななえ}を七重はみていた。みていた、というより、ぼんやりと視線をあずけていたのである。

たしかにあのときから、信じられないことばかりがつづいている。

いったいあのひとは、どういうつもりで、この小屋へ入って来たのだろうか。ここへ来る必要は、なにもなかったはずである。しかし、しばらくさしむかっているうちに、わかってきたことがある。高熱にあえぎながらも（だれかが私を助けに来てくれるのではないか）と思っていた、そのだれかが、つまりはあのひとではなかったのだろうか——と。

あのひと——主馬と呼ぶ（なんの目的でこの宿場へ来たかの理由は話さない）ひとは、いま、夕食を運ぶために宿へもどっている。

「なにも食べない、ということはいけない。食べて、身体^{からだ}の力を少しでもたくわえることです。

どのみち川止めだし、私もついていてあげよう。袖すりあうも他生の縁、ということもあるのだから」

主馬は、そういう置いて小屋を出て行ったのだ。

——七重は主馬に、自分がこの小屋へ運ばれてくるまでの、いきさつは話している。

この川の渡しを渡ったときには暮れかけていて、宿に入ったが、その日は途中ひどく息切れがしたが、夜半に高熱を出し、嘔吐と腹痛で悶転した。それは、どう辛抱しようと思っても、こらえきれないもので、人目もはばからぬ悶えようをして、苦しみ疲れに眠り込んでしまったが、ふと覚めかけた淡い意識に、医師のいう言葉をききとった。

「あぶない。これは疫病だ。病人をここへ置くと、宿じゅうが迷惑を受けることになる。川は水嵩が増しはじめているから、明日は川止めになる。廊下にまで客を泊めねばならんことになるかもしれない——そうなると」

あとはひそひそ話しているようだったが、夜が明けると宿の主人が「疫病の者を宿に置くと役人の咎めがきびしいから」と納得ずくで移されたが、その相談を持ちかけられたときには、七重は朦朧としていて、相手の為すに任せるより仕方はなかった。

さいわい、路銀は充分に持っていたので、宿の主人には、当分の介抱料も含めて渡したし、それで、ともかく食事も運んでくれているのである。

「離れ家を一軒、手に入れておりますんで」

と、そのとき主人がいったが、離れ家というから離室かと思っていたら、運ばれて来たのは竹藪の中の小屋である。たぶん以前は船頭でも住んでいたのだらう。久しく無人だったのを、あわ

てて掃除したらしいが埃くさく、むろん畳もあるわけはない。六畳ほどの広さに土間が少々つき、裏手に厠があるほかには井戸もない。土間にかまどが二つあるきりで、その一つに釜がかけられているが、これは水甕みずがめのつもりで、水だけは汲み入れてあり、柄杓ひしやくと茶碗がひとつ置いてある。そのほかには調度はなにもないのである。

「遠いところへ、島流しになっているようでした。泣く気力もなくなっていたのです」と、話し終えて七重がいったとき、

「これは私のかんじだが、あなたは死ぬひとではないような気がする」

と、主馬はひとりごとのようにいっている。慰めるつもりだったかもしれない。

主馬が、

「私も、ここへ泊めてもらおう。あなたさえ、かまわないといってくださいるなら」

といいだしたのは、そのあとである。

迷惑はかかってもかまわない。一緒に泊る以上、あなたもひとりでいるよりは安心だろうし、できるだけ看護はしてあげたい——と主馬は、ためらってはいいい淀む七重を説き伏せるようにして、やがて、いったん小屋を出ると、宿の主人とどう話したのか、二、三枚の蕨と、薄い夜具を二枚運び込んで来たのだ。

「なにしろ川止めの客があふれていて、夜具も足りずに近所から借りてきているらしい。貸してくれたのは、あなたが渡した金子きんすのききめと、物好きな介抱人が現われて、大助かりだったからでしょう」

と、主馬は笑ってそういった。